

「本能寺の変」を巡るふたつの「しばた」

ごあいさつ

今年度新発田市に寄託された溝口半左衛門家文書のうち、「本能寺の変」直後に柴田勝家から溝口半左衛門に宛てて出された書状が注目を集めています。このたび、この「柴田勝家書状」を初めて公開するとともに、同じ時代に新発田で活躍した佐々木加地一族のひとり、「新発田重家」にも注目し、「本能寺の変」によって命運が大きく左右されたふたつの「しばた」氏と、のちに新発田藩主となる溝口秀勝とその兄弟「溝口半左衛門」について、市内に残る戦国時代の古文書や、城館遺跡の出土品を公開し解説いたします。どうぞごゆっくりご覧いただき、悠久の歴史に思いを巡らせていただければ幸いです。

最後に本展の開催にあたり、貴重な古文書を寄託いただきました溝口秀雅様ならびにご家族様、ご協力いただきました皆様に心からお礼申し上げます。

1. 溝口秀勝と半左衛門

溝口金右衛門尉定勝（のちの初代新発田藩主溝口秀勝、以下金右衛門）は、尾張国（現在の愛知県）中島郡溝口村の地侍、溝口勝政の子として生まれ、織田信長の家臣丹羽長秀に仕えていました。勝政には、ほかに二人の男子、半左衛門尉勝吉（以下、半左衛門もしくは勝吉）と伝三郎、娘が一人いて、勝吉は柴田勝家、伝三郎は豊臣秀吉に仕え、娘は織田信長家臣の加藤清重に嫁いでいました。戦国の動乱により織田・柴田・豊臣家の滅亡後、生き延びた兄弟や妹(?)の子は溝口家に引き取られ、新発田藩の家臣団に加わります。これらの家系は、新発田藩の歴代藩主の業績をまとめた「御記録」・歴代家臣の各家の出自をまとめた「世臣譜」の記述にみることができます。実は、この二つの記録の編さんを手掛けた人こそが溝口勝吉から7代目の溝口半兵衛長裕であり、このたび新発田市に寄託された溝口半左衛門家文書も代々、

この家に大切に保管されていたものです。世臣譜の中には半左衛門家の出自に関する記述はなく、御記録の中で秀勝は勝政の長男と記録されており、半左衛門勝吉は次男として記述されていました。



「新発田藩初代藩主溝口秀勝像」（当館所蔵）

2. 溝口半左衛門家文書の発見

溝口半左衛門家文書（以下、半左衛門家文書）が知られるようになったのは、2007年の乙川優三郎氏が溝口半兵衛長裕を題材にした小説『露の玉垣』を刊行したことがきっかけです。また、文庫版（乙川2010）の解説を担当した島内景二氏が溝口半左衛門の子孫宅に保管されていた文書を預かり論考（島内2006）をまとめています。この中で家譜簿に記述された柴田勝家書状関連の記事と、それを半兵衛長裕が考証していることを指摘しています。『露の玉垣』刊行後、半左衛門家文書は新発田市立図書館が保管して目録作りの作業が始まりました。島内氏の論考や、目録作成を進めた結果、「御記録」や「世臣譜」に書かれていないことが、明らかになりました。

『新発田市史』（新発田市史編纂委員会1980）のうち、溝口家に関する記述の多くは「御記録」・「世臣譜」に記載された内容を根拠にしています。ここでは、初代藩主の秀勝は溝口勝政の長男で慶長15（1610）年に63歳で没したと記されています。一方、半左衛門家文書によれば、半左衛門勝吉は天正11（1583）年4月、柴田勝家に従って北の庄城で48歳（あるいは46歳）で没しています（家譜では幸綱と改名）。このため、秀勝の方が10歳ほど年下となります。勝吉の没後、子の長吉は母とともに溝口秀勝に引き取られます。以後、溝口半左衛門家は、溝口家家臣団の中でも歴代藩主が重く見る特別な家系（島内2006）となり、長裕の時に家老として藩史の編さんに携わることとなります。手元に資料（半左衛門家文書）があったにもかかわらず、世臣譜に半左衛門家の記述がなく、藩祖秀勝が長男として記述されていることは、秀勝を敬い、長男が家督を相続するという当時の武家の慣習に合わせた記録を残すためと解釈することもできます。

2. 本能寺の変当時の北陸の情勢

天正10(1582)年6月2日に起きた本能寺の変。この前後の情勢を、新潟県下越地方、越後国、北陸地方と視野を広げ、佐々木加地・溝口・新発田氏の動向に注目しながら、概観してみましょう。現在の新発田市域に相当する範囲のうち、鎌倉時代に地頭として入った佐々木加地氏が加地・新発田・竹俣の三氏に別れて加地荘を治め、戦国時代には豊田荘にも新発田氏が勢力を広げていました。室町時代の領主はそれぞれの支配地に一辺50m～100m程の方形の屋敷地を設け、周囲に土塁と堀を巡らせた方形居館に住みます。領主クラスの居館の中には会所と呼ばれる対面場があり、一族郎党を集めての集会や軍議、年中行事や宴の場として用いられました。支配領域の耕地などを開発する傍ら、戦の際には一族が集まって遠征したり、逆に攻め込まれたら居館近くの山上に築いた山城に籠って応戦することで、領地を経営していました。また、戦国時代になると、居館を山城の近くに移したり、国衆として上杉謙信の配下に属し、春日山城にも屋敷地を持つようになります。

上杉謙信の後継者をめぐる御館の乱で、佐々木加地一族の新発田・竹俣氏はいずれも上杉景勝を支持、加地氏は当初景勝側だったものが、上杉景虎支持となります。争いの結果、景勝が勝利し、越後の覇権が継承されました。ところが、新発田の名跡を兄の長敦から継いだ重家は次第に景勝政権から距離を置き、会津の輩名盛氏や織田信長と結んで景勝の意に反する行動に出ます。

天正10年に織田信長は、甲斐の武田氏を滅ぼし、上野・信濃・越中の三方から越後への侵入を企て、新発田氏はこれに呼応して北から上杉氏を牽制します。一方、佐々木加地一族のひとり竹俣慶綱は、中条景泰らとともに上杉方として越中国の魚津城に籠っていました。信長配下の柴田勝家らに包囲され、上杉景勝ら越後からの援軍も近づけない中で奮戦したものの、6月3日落城を悟って城将全てが自刃しました。この前日の6月2日未明に起こったのが「本能寺の変」です。

溝口金右衛門(のちの秀勝)は、信長から若狭の支配を任された丹羽長秀に従い、自身も信長の直臣に取り立てられて若狭国高浜城主となっていました。長秀は、四国への出兵する準備のため、金右衛門とともに大坂に滞在中、本能寺の変に遭遇します。その時、半左衛門は高浜城に留守居役として残っていました。



新発田重家像
(福勝寺所蔵)

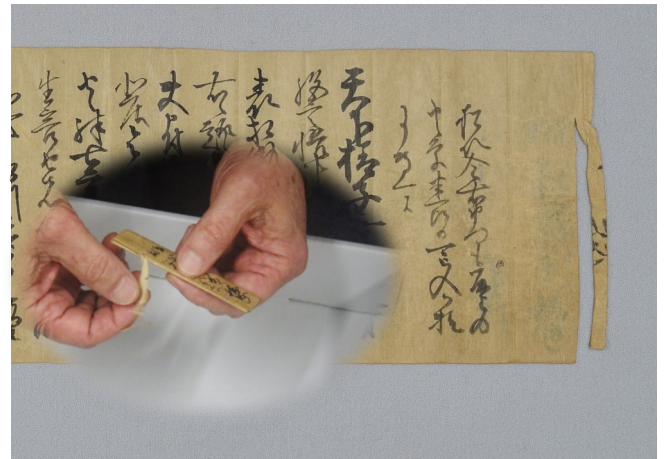


上杉景勝像
(米沢市上杉博物館所蔵)

3. 柴田勝家の書状とその後

柴田勝家は、魚津城落城後、6日に信長の死を知って、9日には北の庄城へ戻り、明智光秀の動向、光秀に呼応しているのは誰で、味方は誰なのかなどを探るため、使者に手紙を持たせて信長配下の武将と連絡を取ります。その連絡相手のひとりが溝口半左衛門勝吉だったのです。

勝家からの手紙は、2点あります。小さく巻き折られ、紙の最も外側は下から途中まで縦に切れ目が入り、紐状の端は文書を一周して結ばれ、その上に宛名が書かれています。これは「切封」という封式の手紙です。通常、受け取り主が何度も読み返すうちに、まわしてある封は無くなってしまふものです。6月11日付けの書状は切封がなくなっていますが、10日付けの書状は切られずに残り、当時のまま大切に保管されていたと想像できます。



切封の様子

勝家は、半左衛門・金右衛門兄弟を介して丹羽長秀と連絡を取り、長秀が反明智である情報(光秀の娘婿織田信澄の殺害)を得て、協力して光秀を討とうと働きかけたことが、10日付けの手紙から読み取ることができます。それだけでなく、若狭国内の不穏な動き、勝家から大坂への連絡ルートも充分ではない事が伝わってきます。11日付けの手紙が書かれた日、畿内では、羽柴秀吉が「中国大返し」を経て尼崎に到着。翌日の軍議で秀吉は丹羽長秀らとともに打倒明智軍を編成し、6月13日の山崎の合戦で勝利して、信長後継者争いの主導権を握ることになります。

清洲会議で、秀吉が推す三法師が信長の後継者となる一方、秀吉と勝家の対立は決定的となり、翌天正11(1583)年、賤ヶ岳の戦いを経て越前の北の庄城で秀吉に敗れた勝家は自害します。溝口家は金右衛門が丹羽長秀に従って、若狭や近江の海津(琵琶湖北岸)付近の城郭を整備し(山荘家文書)、秀吉方に属して賤ヶ岳・北の庄へと転戦します。一方、半左衛門勝吉は勝家に付き、北の庄で戦死します。勝吉の3人の男子のうち、末の十蔵が秀勝に引き取られ、半左衛門長吉として家臣となります。

4 新発田市内の中世城館

本能寺の変の後、上杉氏の攻勢を受けた新発田氏の城館は天正15(1587)年に落城し、新発田氏は滅亡します。加治城も落城し、その後加地氏は一時許されますが慶長2(1597)年に上杉景勝の機嫌を損ねることがあり、竹俣氏が佐々木加地一族のうちで唯一、慶長3(1598)年に上杉氏が会津へ国替えされるのに伴い越後から離れました。

新発田市内には、52箇所の城館跡、38箇所の山城跡が確認されています。これらの多くは、佐々木加地氏に関連すると考えられています。市内のうち、戦国時代は概ね加地氏が北端部を除く加治川・紫雲寺地区・菅谷地区を、竹俣氏が川東地区を、新発田氏と五十公野氏が新発田・佐々木・五十公野・米倉地区や豊浦地区の一部を領地としていました。このうち、発掘調査が実施されているのは13遺跡あり、5遺跡を紹介します。

加地氏関連の城館

加地氏が居住したと推定される加治館跡は、堀や土塁の痕跡が現地ではわからず、発掘調査も実施されていないため、詳細は不明です。また、近年の分布調査により、七葉小学校南側の水田中で中世前期の遺跡が発見されるなど、加地氏の居館については改めて検討する必要があるようです。また、加地氏配下の武将が住んだとみられる中・小規模な方形居館が調査されています。

寺内館跡（下寺内）

菅谷から米沢へ向かう街道沿いの谷底平野に立地しています。一辺74mの方形居館で、堀の北・西・南辺の堀を検出し、土塁は開田により削平されています。13世紀の土坑墓、15世紀頃の竪穴建物や掘立柱建物跡が発見されています。出土遺物から16世紀前半まで機能し、館がなくなった後も堀は残り、北辺の堀両岸に近世初頭の石敷遺構が作られています。

箱館跡（早道場）

加治城跡の南西約1.8km、今泉川と坂井川の間を流れる大井川の旧流路から南へ約50mに立地します。一辺70m程の方形居館と推定され、北辺・東辺の一部とその内側の郭内の発掘調査を実施した結果、15世紀前半頃を中心に営まれた堀・柱穴列・井戸が発見されました。土塁は削平により失われていました。堀や井戸か



箱館跡発掘調査の様子

らは漆器・結桶ゆいおけなどの木製品が良い保存状態で出土しています。堀の北東コーナー付近は直角にならず、角が面取りされたようになっています。屋敷地の北東隅は「鬼門」と呼ばれ、当時鬼が侵入する不吉な方向と解釈されていたため、館の北東隅がわからないようにしたと考えられます。この付近の堀から邪気を払うといわれる「胡鬼板」こきいた（羽子板の原型）のミニチュアが出土しています。

竹俣氏関連の城館

竹俣氏の館は、川東地区の上三光地内に集中しています。竹俣氏を補佐した武将の楠川氏くすがわに関連するとみられる館の地名も残っています。

宝積寺館跡（上三光）

竹俣氏の菩提寺宝積寺は、現在の境内の外側に土塁の一部が残っており、古い航空写真などから付近に東西205～225m、南北220～270mの巨大な方形居館があると判明しました。これだけの規模の館は珍しく、竹俣氏の館、寺院説などがあります。屋敷地内の約1/6の範囲を発掘調査し、大型の掘立柱建物跡、方形周溝遺構、溝、土坑、火葬墓などが発見されました。出土遺物も豊富で、国産・中国産の陶磁器には威信財いしんざいと呼ばれる調度品、茶陶、宴会などで盃として用いる土師器皿はじきも含まれています。館は戦国時代になると別のところへ移転し、その跡地が寺院として再利用され、範囲を縮小して現在の宝積寺へと引き継がれたとみられます。

新発田氏関連の城館

佐々木加地一族の新発田・竹俣・五十公野氏は、戦国時代には宗家の加地氏とは別に上杉氏の軍役を負担するなど独立した勢力を持ったといわれ、支配領域は加地荘内だけでなく、南隣の豊田荘にも及ぶようになっていました。現在の新発田市街地・五十公野や米倉、豊浦地区に新発田氏や五十公野氏らに関連する城館が広がっています。

新発田城跡（大手町）

溝口氏による江戸時代の新発田城、二の丸の古丸と呼ばれる一画に新発田氏の城があったという伝承があり、古丸にあたる第8・9地点の調査により、それを裏付ける室町時代の堀の一部や、遺構・遺物の集中域が発見されました。また、第10・12地点の調査により、堀の外側の様子や、落城後に築城された溝口氏初期の遺構も発見されています。

五十公野館跡（五十公野）

五十公野山の南麓、尾根上に五十公野城跡ねごやがあり、その麓、山裾を流れる寺田川を挟んで築かれた根小屋と呼ばれるタイプの城館です。土坑・井戸・溝などから戦国時代を中心とした遺物が出土し、天正15年の落城時の様子ねんじぶつを窺い知ることができます。また、鎌倉時代の作とみられる念持仏と呼ばれる小型の観音像が出土しました。

6 出土品から見た戦国時代の武士の暮らし

中世の遺跡から出土する遺物は、焼物の土器や陶磁器、木製の漆器・桶・柱材、石でできた石臼・砥石、金属の刃物や釘から貨幣、果ては骨から食物のカスや食べ残しまであらゆるものがあります。この時代はそれ以前と比べ、お金を使った取引のしくみや、モノを遠くから取り寄せる流通の仕組みが整ったため、遠方からの取り寄せ品や、珍しく高価なもの、都の情報や文化を取り入れたものが、地方の有力者の手元にも届くようになります。

戦国時代を含む中世の武士は、加地氏のように荘園全体を統括する領主、新発田・竹俣氏のように荘園領主から分家として別れ、荘園の一部の領有を分担する領主、さらにこれらの領主の配下の武将などがあります。また、戦国時代には上杉氏のように複数の荘園領主のさらに上位で、大名として一国を支配するランクもあります。城館遺跡も同様に、その規模や出土品からランク分けをすることができます。ここでは出土品に注目してみましょう。出土品の多くは、国外からの輸入陶磁器や、瀬戸美濃・越前・珠洲などの国内の特産地で作られた焼物です。この中には食器・容器という機能だけでなく、書院の棚や床の間に飾ることで富や権力を誇示する威信財と呼ばれる調度品、茶の湯などの文化的嗜好品を供する道具があり、格の高い城館程これらが出土する傾向が高くなります。また、領主の館では年中行事や、集会に伴い、宴が催され、その時に盃として用いる使い捨ての素焼きの土器（土師器）が、数多く出土します。新発田の周辺では、この素焼きの土器は三種類の技法（手づくね・ロクロ成形回転系切り・ロクロ成形回転ヘラ切り）が用いられています。特にヘラ切りの技法はこの地方特有のものです。

7 藩主溝口家・家臣溝口家

賤ヶ岳の合戦で活躍した溝口金右衛門は、加賀大聖寺

城主となります。その後、豊臣秀吉の家臣となって、秀勝と改名し、北の庄城主堀秀治が越後に移封するのに伴い、新発田に入封します。以後、新発田藩は江戸時代全般を通じて、12代にわたって溝口家が治めることになります。

溝口半左衛門勝吉の子、長吉は、父の死後溝口家の家臣となります。以後代々、半左衛門もしくは半兵衛の名跡を継承します。また、父勝政の娘が嫁いだ加藤清重は、信長の死後、溝口家の家臣に加わり、後に溝口姓を名乗ることを許され、溝口内匠家の祖となります。このほか、秀勝の娘が嫁いだ越前朝倉氏の流れをくむ土橋吉六が、豊臣秀頼の家臣となり、大坂夏の陣で吉六が戦死した後、子の弥太郎が溝口家に引き取られて溝口姓を与えられ、溝口伊織家の祖となりました。これら溝口秀勝の親族の家系は要職について江戸時代の新発田藩政を支えます。

大聖寺から五十公野・新発田へと移された藩主溝口家の菩提寺の浄見寺（のちの寶光寺）は、曹洞宗です。これは初代の秀勝が一向宗から宗旨替えをおこなったため、父勝政の墓は大聖寺から移した浄土真宗の託明寺にあり、半左衛門家の菩提寺となっています。

8 溝口氏入封期の出土品

新発田氏が滅び、慶長3（1598）年に溝口秀勝が越後に入封して新発田城の築城に取り掛かります。その頃に埋められた土坑の上に二の丸の土塁が築かれ、昭和30年代までここに隅櫓が建っていたため、江戸時代初め頃の遺物が後世の攪乱を受けずに残っていました。これらをみると、陶磁器類の組み合わせや、素焼きの土器の様子が新発田氏時代のものと変化していることがわかります。

参考文献

阿部洋輔2019「溝口家所伝の新発田勝家書状について―本能寺の変をめぐる―」『新発田郷土誌』第47号

乙川優三郎2010『露の玉垣』新潮文庫

新発田市史編纂委員会 1965『新発田市史資料編第1巻新発田藩史料(1)藩主篇』

新発田市史編纂委員会 1965『新発田市史資料編第2巻新発田藩史料(2)藩臣篇』

新発田市史編纂委員会 1980『新発田市史』上巻

新発田市教育委員会1990『三光館跡・宝積寺館跡発掘調査報告書』

新発田市教育委員会1997『新発田城跡発掘調査報告書』Ⅱ

新発田市教育委員会1999『寺内館跡発掘調査報告書』

新発田市教育委員会2001『新発田城跡発掘調査報告書』Ⅲ

新発田市教育委員会2006『太田遺跡・箱館跡発掘調査報告書』

新発田市教育委員会2017『五十公野館跡発掘調査報告書』

島内景二2007「越後新発田藩家老・溝口長裕の伝記的研究」『電気通信大学紀要』19巻1・2合併号

新発田市立歴史図書館 令和元年度秋季企画展

「本能寺の変」を巡るふたつの「しばた」 配布資料

執筆・鶴巻康志（新発田市立歴史図書館）

編集・発行：新発田市立歴史図書館

新潟県新発田市中心4-11-27

刊行：令和元年10月5日